

## 附属義務教育学校について

福井大学教育学部附属義務教育学校

校長 三田村 彰

### 1 附属学校をめぐる状況

全国国立大学附属学校連盟校園長会議での文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長の講演は、全国の附属学校の現状に対する厳しい指摘から始まった。

- ① 教育実習校としての役割は、教員養成学部 of 学生減少により縮小していくのではないかと。そもそも教育実習は公立学校でできるのではないかと。
- ② 研究開発校としての役割は、附属学校以外では役に立たない研究をしているのではないかと。
- ③ 地域貢献として進学受験校の役割を果たしているというが、私立学校の方が成果をあげているのではないかと。

このような指摘を、全国の附属学校関係者はどのように受け止めているのだろうか。

この時、私のメモには「附属学校不要論？」と赤字で記されている。

### 2 福井大学教育学部附属学校改革の方向性

#### ① 職能成長を支える教員研修学校

附属学校を教員になる前の4年間の教育実習校から、生涯にわたる職能成長を支える教員研修学校へ転換する

#### ② 地域の教育課題を解決する研究開発校

時代と地域の要請に応えるため、附属学校を幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校の校種間にまたがる研究開発校に転換する。

#### ③ 共働き家庭からでも入学できる普通の学校

男女共同参画社会を支えるべく共稼ぎ家庭からも入学しやすい学校に転換する。

この改革の動きは、平成27年度の附属学園創設から本格化することになる。

平成28年度には、附属幼稚園の延長保育開始、附属小学校と附属中学校の一貫教育校としての準備などが進められた。

### 3 義務教育学校の制度化

平成24年7月に提出された、中央教育審議会「学校段階間の連携・接続等に関する作業部会」の報告書では、義務教育学校について「地域の事情に応じた制度選択ができる」「学力向上を図るには極めて自然」といった賛成意見がある一方で、「人間関係が固定化する」「9年間の途中で挫折した場合が心配だ」といった慎重意見も見られた。これらの意見を踏まえ、義務教育学校の創設は、将来の検討課題として見送られた。

平成26年7月に、政府の教育再生実行会議から「9年間の義務教育課程を4・3・2制や5・4制のように弾力的に設定できるようにする」などの具体的な方向性を盛り込んだ学制改革に関する提言がなされた。この提言を受け、平成26年10月中央教育審議会の小中一貫教育特別部会は、「小中一貫教

### 目次

- 巻頭言 (1)
- スタッフ紹介 (3)
- 院生紹介 (5)
- インターンシップ／週間カンファレンス報告 (10)
- 月間カンファレンス報告 (15)
- 平成29年度 教員免許状更新講習について (17)
- 研究紹介 (18)
- ラウンドテーブル速報 (20)
- スケジュール・編集後記 (20)

育学校」を制度化するよう求める答申案を示している。不登校やいじめ問題などの解消に効果があると評価し、各市区町村の判断で導入できるよう法改正するとともに、実施する学校には、地域の特徴に応じた独自教科の設定を認めることも提案している。同年12月に、中央教育審議会は小中一貫教育の制度化と推進方策などを答申した。

平成27年6月に、小学校と中学校の9年間の義務教育を一貫して行う小中一貫校を制度化する学校教育法等を一部改正する法律が成立し、平成28年4月から義務教育学校の創設が認められるようになった。

平成29年4月に、全国の国立大学附属学校の中で、福井大学教育学部附属小中学校と京都教育大学附属小中学校の2校が義務教育学校として新たにスタートした。

#### 4 福井大学教育学部附属義務教育学校の特徴

##### ① 本校の使命

- ・義務教育学校として、9か年の一貫した教育方針のもと、心身の発達に応じてどの子どもも安心して学べる学校をつくる。
- ・教員研修学校として、教育実習を受け入れる教員養成のための学校としてだけでなく、教職大学院と一体となって、現職教員も含めたあらゆる世代の職能成長を支える国際的な教員研修学校をつくる。
- ・教育研究学校として、時代の要請に応えるべく、県内公立学校や教育委員会、大学と協働して、学校段階間の円滑な接続をはじめ新たな教育課題の解明に向けて理論を構築し、実践研究を積み重ねて広く成果を発信しながら世界をリードする学校をつくる。
- ・地域に貢献する学校として、地域に根差したテーマでのカリキュラム開発や、地域の新しい学校マネジメントのモデルとなるような社会に開かれた学校経営について研究し発信する、福井県に貢献する学校をつくる。

##### ② 本校の特色ある教育活動

- ・全教科・領域で9か年かけて取り組む協働探究学習

対話や議論、大いなる試行錯誤の中で、ロングスパンの課題解決型の学習を全教科・領域で実施し、深い理解を伴った生きて働く知を構成する。

- ・世界とつながるグローバル教育

9か年かけて実生活で使える英語を習得。外国からの訪問者や留学生との積極的な対話や、海外の学校と姉妹提携し、スカイプを活用しての日常的な対

話等を通して、英語だけでなく、これから求められるグローバル感覚を磨く。

- ・福井大学との強い連携によるハイレベルな教育実践

大学での最先端の教育研究を授業に反映させたり、子どもたちが直接大学の研究に触れて将来も学び続けるような知的好奇心を育んだりできる機会を設定。教育学部以外の学部との連携も視野に入れる。

- ・心と感性を磨く体育的・文化的活動

子どもたちの中で大切に世代継承されている音楽文化に裏付けされた行事をはじめ、様々な体育的・文化的行事を子どもたちの手で創り上げていく中で、人として生きていく上で必要な道徳心や人間ならではの感性を豊かにしていく。

- ・多様性を尊重し視野を広げる附属学園の連携強化

附属学園として、幼稚園・特別支援学校との連携を日常的なものにし、多様な他者を認め対話の幅を広げて、共に学び共に豊かな社会を創り上げていく担い手としての意識を育むと同時に、様々なニーズに応える教育体制を構築する。

平成29年4月開校

附 国立大学法人福井大学教育学部附属  
義務教育学校

F910-0015 福井県福井市二の宮4丁目45番1号 <http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-g/>  
【総機連絡】TEL (0776) 22-6891 FAX (0776) 22-7590 E-mail fuzoku-e@f-edu.u-fukui.ac.jp  
【後援連絡】TEL (0776) 22-6985 FAX (0776) 22-6703 E-mail fuzoku-j@f-edu.u-fukui.ac.jp

# スタッフ紹介



## 王 林鋒 ワン リンフォン

四月に教職大学院の特任助教として着任いたしました王 林鋒と申します。専門は英語教育・授業研究です。今は、教材開発、英語教科書分析を行っております。これまでは、博士課程の院生として大学院での研究や専門学校の非常勤講師をしながら、日本の授業研究を海外に伝える仕事に携わっていました。日本の授業の質の高さの秘訣は、独自の教員研修システムである授業研究にあると、世界中で言われています。現在では、授業研究が50以上の国と地域で紹介され、実践されています。協働探究学習の推進も含め、福井大学教職大学院の最大の特徴・魅力は、現場が求める実践力を培うため、「学校拠点方式」による教員養成・教師教育を行うことにあると思います。ぜひ福井で成長させていただきたいと思っております。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

私は、中国の出身です。中国と言っても、広いですが、本籍は河南省です。中国において一番歴史のある地域で、黄河の南にあるため河南と称されています。中国古代文明の発祥地の一つで、中原文化の元であり、四つの古都（鄭州、洛陽、開封、安陽）が、河南省に位置します。省として、人口が一億人を超えたのは、河南省が初めてです。そのため、学力競争も特に激しいです。歴史が古いと言っても、封建的社会風潮が根強く、特に重男軽女（男尊女卑）の思想がいまだに残っています。私には9歳上の姉がいますが、私が生まれた1985年は、一人っ子政策が厳しく実施された時期でした。当時、とある占い師が妊娠している母のお腹を指して「男の子が生まれるよ」と言ったため、私はこの世に生まれることができました。冗談のようですが、占い師が間違ったお陰で今の私があります。今でも「お姉さんもいるの？」と中国人に驚かれています。名前も、男らしい名前です。会う前に男子だと思われることは少なくありません。

当初は、両親の職場にばれないように、遠方の親戚が私を預かっていました。しかし、5、6歳の頃、

父の職場の知人による告発がありました。その後、罰金を払わされましたが、これをきっかけに両親、姉とやっと一緒に暮らせるようになりました。小学校時代から、私の存在が家族に迷惑をかけたと意識していました。母のスパルタ教育（タイガーマザー）を受けても、叱られないように願う毎日でした。唯一癒されたのは、学校で教師、クラスメートと一緒に過ごす時間でした。教師やクラスメートとのコミュニケーションを楽しんでいました。ずっと学校にいたいという気持ちが強く、教員養成の師範大学を選びました。

2001年、実家とかなり離れた都市で、一人で大学生活をスタートしました。学部時代には、英語教育が専門でしたが、海外に行く機会もなく、英語の教科書だけを猛勉強しました。第二外国語として日本語を選択しましたが、来日前にほとんど忘れてしまいました。今振り返ってみれば、その時すでに日本とのご縁が生まれていたのではないのでしょうか。学部時代に高校で代行の英語教員として高2を教えたり、小学生を対象にした英語塾で教えたりしました。そこで、青海省チベット族自治州、甘肅省敦煌、寧夏回族自治区に行く資金を貯め、一人旅しました。国内にいながら、異文化・少数民族の文化にふれあうことができ、いい刺激となりました。

大学卒業時、教育学や教授学、学習指導の力が十分でないことを強く感じ、大学英語教員の内定を辞退して、国立師範大学の教育学修士課程に進学しました。カリキュラム及び教授学理論の3年間のコースでした。欧米を中心に関連する理論書を読む日々でしたが、思弁哲学の傾向が色濃く、実践・実地に触れる機会がまったくありませんでした。修士修了時、同じコースの博士課程に進学すると、より形而上学になるのではないかと悩んでいたところ、日本に留学する公募があり応募し、来日7年目の現在に至ります。

初めて日本の学校を見学した時、自分の原体験と異なることに気づきました。その中で、一番印象的なのは、授業のテンポ・リズムです。自分が受けてきた授業は、早いテンポで答え合わせを中心に到達目標を確認する授業でした。そのため、子供の答え

をいつまでも待つ日本の教員を見て、心配でいられませんでした。その理由は、大事な授業時間を待つことに使うのがもったいないのではないかと、教員は必要な支援をしていないのではないかと、授業の進度が遅れるのではないかと、そして、できる子はどうするのかということでした。今は、授業中に子供に考えさせる時間の大切さ、そして、子供たちの協働的な学びの重要性が分かりました。

現在の中国は、教師教育に新たな取り組みを打ち出しています。2015年から全国的に教員免許資格を

取得するには、国家試験を受けなければなりません。そして、終身制だった教員免許が、5年に一度審査を受けることになりました。一連の改革の行先を見据えて、日本の実践から知見を得て、考えていきたいと思っております。様々なことを質問していただくことが、自分自身の勉強にもなりますので、中国語・中国事情・中国の教育に興味を持っている人は、お気軽にお声をおかけください。



## 花井 渉 はない わたる

2017年4月3日付で教職大学院の特命助教として着任いたしました花井渉と申します。専門は、比較・国際教育学です。これまで、主に国際バカロレア（International Baccalaureate: IB）を通じて生徒が獲得した能力やスキルをどのように公的に認証評価し、円滑な高大接続制度を構築することができるのかについて、主にイギリスにおける資格試験制度及び大学入学者選抜制度を中心に研究を進めてきました。そのため、

これまでには主に制度・政策分析を中心に研究を進めてきましたが、現在はIB等をはじめとする国際教育における教科学習を通じて得た知識の応用、教科外活動の実践やその評価、そしてそれを担う教員の力量形成について関心があります。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

私は、元々は愛知県の豊田市生まれですが、両親が現在名古屋におり、私自身幼少期に団地で泥だらけになりながら遊び回った思い出から、出身地を聞かれると「名古屋出身」と答えています。それは、自分のアイデンティティのようなものを感じる場所であるからだと思えます。ただ、私はその後、現在まで国内外を含め、多くの「アイデンティティを感じる場所」を得ることになります。

私は小学校入学前に、父親の仕事の都合で、イギリス中部の街、ダービーシャー（Derbyshire）に移り住み、そこで5年間、平日は現地校、そして土曜日に日本人補習校に通いました。イギリスでは、現地校という、当時は全く分からない英語での学校生活に戸惑いながら、また補習校では日本の学習指導

要領に準拠した教育を受け、日本とイギリス両方の学校文化を経験しました。この経験から、イギリスは私にとっての「アイデンティティを感じる場所」の一つとなりました。

その後、私は小学校4年生の3学期に帰国し、愛知県豊田市の小学校に転入しました。小学校では始めは帰国子女ということで、物珍しさから注目の的でしたが、次第に避けられるようになりました。そこで、人間関係の築き方を学んだような気がします。ただ、幸いにも野球部に入ったことで徐々に友達の輪が広がり、日本の学校文化にも慣れていくことができました。

小学校と中学校の5年間を日本で過ごし、高校受験を控えていた頃、再び父親の仕事の都合で、今度はベルギーに引っ越すことになりました。ベルギーでは、3年間、インターナショナル・スクールに通いましたが、そこでは、日本やイギリスでの学校文化とは全く異なる国際色豊かな学校文化があり、戸惑いながらもこれまでの経験（適応力）を生かしながら、新たな学校文化に慣れていきました。そこで、私は国際バカロレア（IB）という国際教育プログラムを受け、高校卒業時のIB試験（後期中等教育修了資格試験/大学入学資格試験）を経て、IB資格を取得しました。IBプログラムは、6科目3要件というカリキュラム構造になっています。特にIBカリキュラムの中核を成す3要件は、生徒が主体的に調べ学習を行ない、それを卒業論文としてまとめる「課題論文」（Extended Essay）、6科目で得た知識を応用し、課題発見解決学習、探求学習を行なう「知の理論」（Theory of Knowledge）、そして2年間で150時間の教科外活動を行なう「創造性・活動・社会奉仕」（Creativity, Action, Service）があり、IB資格取

得の必修要件となっています。そのため、IBは6科目の教科学習と同時にこれらの3要件をこなすという、高校生にとっては非常にハードな教育プログラムとなっています。ただ、このIBプログラムの経験を通じて、私は批判的に文章を読み解く力、書く力、異文化間コミュニケーション力、異なる意見をもつ人の話を聞く力等々、多くのことを学ぶことができた貴重な経験だったと思います。この経験から、ベルギーもまた私にとっての「アイデンティティを感じる場所」になりました。

その後、私はIBの課題論文等を通じて関心をもっていた日本の子どもを取り巻く心理的な課題をより深く学ぶために、九州大学教育学部に入学し、福岡に移り住みました。九大入学後には、自分の関心が教育心理学から徐々に国際的な教育背景をもつ子どもの教育接続や教育評価へと移り、比較・国際教育学研究室に配属となりました。それ以降、私は学部、修士、博士課程と合わせて10年間、福岡にお世話に

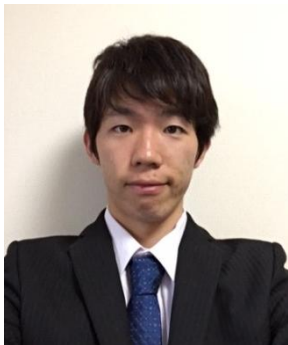
なり、福岡もまた私の「アイデンティティを感じる場所」になりました。

こうして振り返ると、私には多くの「アイデンティティを感じる場所」があることに気づかされます。そして、それぞれの場所で、異なる学校文化、教員、生徒や地域の人々等と出会い、多くの良いことも、また時には辛いことも経験してきました。それらすべてが今の自分につながっていると感じています。

そして、今ここ福井の地で、福井の多様な学校文化を拝見させていただいています。福井県の歴史、風土、文化の多様性を体感しながら、今後少しずつ福井を知っていき、院生、学生や教員の皆さん一人一人と寄り添いながら、それぞれの成長や発展を微力ながらサポートしていければ幸いです。そして、今後福井も私の人生の中の「アイデンティティを感じる場所」になれば大変嬉しく思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

## 院生紹介

### 教職専門性開発コース1年/福井市明新小学校



#### 山崎 洸亮 やまざき ひろあき

はじめまして。教職専門性開発コースに入学しました山崎洸亮（やまざきひろあき）です。昨年度まで福井大学の障害児教育コースに在籍していました。福井大学での生活は5年目になりますが、フレッシュな気持ちで頑張りたいと思います。

私が教育という分野を進路に考えるようになったきっかけは、子どもと係わる活動を続けてきたからです。中学生の頃からジュニアリーダーズクラブという団体に所属し、地域の子ども会などでレクリエーションをすることで子ども達を楽しませる活動を続けてきたことから、「子ども達が楽しんでくれるためにどのような仕掛けをしていくべきだろう」と仲間と考え話し合う時間や作り物が好きで、漠然と教育に興味を持つようになりました。医療にも興味があったことから大学では特別支援教育を学んでいま

したが、小学校の教育実習の際に、通常学級にも支援の必要な子ども達が想像以上に多いことを知り、その子達の支援をしたいという思いから、現在は小学校教諭を志望しています。

小学校は誰もが通う場所であるし、そんな場所だからこそ「学校に行くのが楽しい」と思ってもらえるような環境を作りたい。そのためには教師自身がキラキラとした存在でありたい。そんな思いから、「自分も子どもも楽しいと思える学級づくり」を目指しています。長期インターンシップでは、主に子ども達の心理面から楽しい学級や楽しい授業について実践経験を積みながら何度も悩み考えていきたい気持ちでいっぱいです。

さらに、他校にインターンシップに訪れている学生と週に1度、拠点校・連携校に勤務されている現職の先生方と月に1度カンファレンスがあることが、福井大学教職大学院の魅力の一つであると私は強く感じています。子どもとの係わりの中で生まれた互

いの悩みを共有したり、共に解決策を探ったり、学生や先生方のお話の中からこれからの自分の子どもとの係わりの方針を考えたりする時間はとても楽しく、とても有意義に感じています。このような活動

を繰り返し、何度も悩み抜きながら教師としてのスキルをどの面からも磨いていきたいと思います。これからどうぞよろしくお願ひいたします。



### 教職専門性開発コース1年/

福井大学教育学部附属義務教育学校・前期課程

橋爪 志歩 はしづめ しほ

はじめまして、橋爪志歩と申します。今年の3月に奈良教育大学を卒業し、大学では4年間書道を専門に学んできました。

私は元々、小さい頃から「教師にだけはなりたくない」と思って過ごしてきた人間でした。それは、自分が小中学生だった頃、あまり尊敬できる先生に出会ってこなかったからです。むしろ、不信感を抱いた記憶が多く残りました。自分に対してばかりではなく、「あのとき、どうして先生は何もしてくれなかったんだろう」「もっとこうして欲しかったな」ということが多々ありました。また、先生方が楽しんで仕事をしているようにも見えず、いつからか「教師にはなりたくない」と思うようになりました。

一方で、私は高2で進路を考えなければならなかったとき、理系にいながらも5歳から続けてきた書道を更に深く学びたいと思い、書道の有名な大学を探した結果、奈良教育大学に進むことに決めました。この頃も、書道の道に行くと言うと先生方は頭ごなしに「芸術の世界は厳しいぞ」となかなか応援はしてくれませんでした。しかし、なんとか奈良教育大学に入学し、当初は「卒業するためには免許を取らないと…」という思いばかりでした。大学の4年間は、全国から集まったハイレベルな人たちと切磋琢磨し合いながら、書道に打ち込む毎日でした。奈良に行かなければ知らなかった世界で、非常に充実し

た日々を送ることができました。そんななかで書道科の仲間たちと共に、小学生に大きな作品を書いてもらい、書道の楽しさを知ってもらう活動や、高校生を募集して、より専門的な書道の授業を行うといった活動などを行ってきました。3回生の夏には、書道科の7人で学生企画を立ち上げ、2週間オーストラリアに行き、小中高校、大学を回って書道の授業をするといった活動もしてきました。これらの活動や教育実習を通して、徐々に教師の仕事の魅力に気が付き始めました。

「教師になりたい」と思ったとき、私の心には「子どもをちゃんと理解できる教師」という目標が生まれました。子どもに自分がしてきたような思いをして欲しくないということが根底にあります。そして私は今、福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程でインターンをさせていただいています。自分の目標に向かって、子どもたち一人一人と丁寧に向き合っていきたいと思っています。また、小学校から大学までバスケをしていたこともあり、運動が大好きなので、勉強だけでなく体を動かすことの楽しさも一緒に伝えていけたらと思います。他の人たちよりスタートラインに立つのが遅かったので、より一層努力し積極的に学んでいきたいと思っています。よろしくお願ひ致します。



### 教職専門性開発コース1年/福井市中藤小学校

服部 哲也 はっとり てつや

はじめまして！今年度、教職専門性開発コースに入学しました服部哲也です。昨年

度までは日本大学理工学部物質応用化学科に在籍し、高分子を専門にバイオプラスチックの研究をしていました。身のまわりの自然現象や日常における科学

的なことに興味があり、このような観点から理科教育に活かしたいと思っています。

さて、私が教員になろうと思ったきっかけは小学3年生まで遡ります。小学校低学年時代やんちゃで学年の問題児だった私は、小学3年生の時に運命的な出会いをします。そのときに出会ったのが、私を変えてくれた恩師です。特別私に何をしてくれたかというような具体的なことは覚えていないのですが、私に足りなかった大切なことをたくさん教えてくださいました。私はそのころからその先生を尊敬するようになり、教員になりたいと思いました。

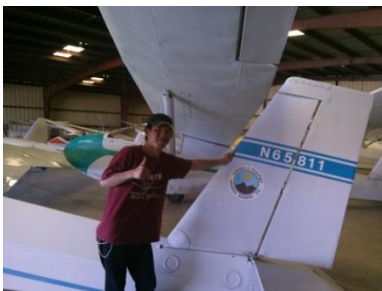
私はごく普通に公立の小学校、中学校を卒業し、北陸高等学校普通科進学コースに進学しました。教員を目指していたため教育学部に入る予定でしたが、親族で失敗している方がいたので親から猛反対されました。そのため、私が得意だった化学系の学科があり教職課程を履修できる日本大学理工学部物質応用化学科に進学し、中高理科の教員免許を取得しました。それからやはり小学校時代の恩師のこともあり、福井県の小学校教員になりたいと考え福井大学教職大学院に進学することを決めました。親は学部

時代の私の頑張りを認めてくれ、福井大学教職大学院に進学することを了承してくれました。

私がこれまでに大事にしてきたことは夢を追いかけて決して諦めなかったことです。まだ叶ったわけではありませんが、夢に向かって一歩ずつ着実に歩んでいます。親に反対されて自分はどうすればいいのかわからない時期もありました。高校受験も失敗しており、大学も自分の本当に入りたかった学部ではありませんでした。大学受験でさえ推薦で入ったため、今まで受験に成功したことはなかったと思います。むしろ人生で成功と言えることはこれまでにありませんでした。それでも自分で努力し、諦めず、夢を追いかけています。

現在、私は中藤小学校で長期インターンに取り組んでいます。学部時代には北陸高等学校に教育実習にいきましたが、公立の小学校となると中学校や高校とは違った教員像が見えてくる気がしました。

今までは教育のことはあまり学んできませんでしたが、これからは教育について深めていきたいと思っています。3年間という長い期間ですが、今後ともよろしくお願いします。



## 教職専門性開発コース1年/坂井市立丸岡南中学校

松野 智志

まつの さとし

はじめまして。今年度から教職専門性開発コースで

学ばせていただくことになりました松野智志です。生まれも育ちも福井ですが、昨年度までは龍谷大学政策学部にも所属していました。この政策学部は教育系の学部ではなく、教員免許も中学校一種社会と高等学校一種公民しか取得することができません。しかし、高校生の頃の私にとって教員という仕事は選択肢の一つでしかなかったため、取得できる免許の事まであまり深く考えていませんでした。そんな私が教員になろうと本気で覚悟したきっかけは学部4年生の教育実習なのですが、その前にまずは『なぜ私が教員という仕事を志したのか』ということからお話したいと思います。

私は両親が教員で、親戚にも教員が多数という一家に生まれました。常に両親の帰宅は夜遅く、土日も頻りに学校へ仕事に行く姿を見て育ったため、幼いころから教員という仕事を身近なものとして感じると同時に、仕事の大変さは理解していました。そ

のため、憧れというより尊敬の気持ちの方が強かったように思います。とはいえ、かつての私は学校という場所に価値を見いだすことができませんでした。それは、自分の居場所、つまり必要とされる場がないように感じられていたからです。しかし、私が学校に通い続けられたのは、小学校の担任の先生がかけてくれた言葉によって「自分を見てくれている人がいる」と思えたことが大きな理由です。単純なことかもしれませんが、私が教員という存在の大きさを初めて実感した出来事でした。このころの経験は、私が教員という道へ向かう原動力になっています。そんな私が本気で教員を目指す覚悟をしたのは教育実習まで時が進みます。もちろんそれまでも教員になりたいと考えてはいましたが、今思うと覚悟まではできていなかったように思います。世の中には様々な形で教育に携わる仕事がありますが、教員にしかできない役割や視点があり、それを担う人間になりたいと思うきっかけだったのが教育実習でした。しかし同時に、私には知識や経験など何もかもが乏しく、このままではふるさと福井の教育を担う人間

にはなれないと痛感もしました。これが教職大学院への進学を決めた大きな理由です。

趣味はたくさんあるのですが、旅に出かけることやグライダーの操縦が特に好きです。大学では航空部に所属し、グライダーのパイロットライセンスも取得しました。これ以外にも様々な経験をしてきましたが、そういった機会に恵まれてきたからこそ、まずはなんでもやってみようとする性格になった

のだと思います。様々な人々と出会い、言葉を交わす中で、いいこともそうでないこともありましたが、しかし、その一つ一つが今につながっていて、この先ひょんなことから役立つこともあるでしょう。教職大学院の二年間はおそらくあっという間に過ぎていくと思います。そのことを自覚し、一日一日を大切にしながら、試行錯誤を重ねていきたいと思えます。



## ミドルリーダー養成コース1年/岐阜聖徳学園大学附属小学校

### 中島 才喜      なかじま さいき

皆様はじめまして。この春より、ミドルリーダー養成コースの一員として学ばせていただくことになりました、中島才喜です。

私は現在、岐阜県岐阜市にあります、岐阜聖徳学園大学附属小学校に勤務しております。県内で最初に設立された私立の小学校で、近くには新幹線の岐阜羽島駅や名神高速道路の岐阜羽島インターがあります。ちなみに福井大学までは、車で約2時間です。

私の教員人生の原点は、今の学校で教諭になる前の一年間にあります。その頃私は、岐阜市の「ほほえみ相談員」として、公立中学校に籍をおきながら、なかなか教室に足が向かない生徒と学んだり、不登校生徒の家庭訪問をしたりしていました。このときの体験は、後に、担任や生徒指導主事になって生かされています。当たり前のように実は難しい、「全員にとって楽しい学級」「毎日全員がそろって、笑顔でいられる学級」を実現していくことが、私の大切な願いとなりました。

現任校では、高学年担任を務めることが多いです。6年生担任として送り出した卒業生が訪ねて来てくれたり、学校で同窓会や成人式をしたり、成人した

教え子と一緒にお酒を飲みながら語り合ったり・・・、これも私学ならではの楽しみで、大事な時間です。

私の専門教科は理科です。これまで、諸先生方から次のようなご指導をいただきました。まず、理科の魅力は、実物が目の前にあることです。これにより、五感を通して自然の事物・現象とふれあい、実感を伴った理解を図ることができます。次に、真実はいつも一つであることや、見通しを持って考えたり、行動したりすることの大切さを伝えていくことです。これは、学級経営や生徒指導にもつながることです。

現任校は私学という特性上、卒業時に私立中学への進学を目指し、早い段階から通塾する児童が多いです。そのため、すでに先行学習や予備知識をもった児童と、そうでない児童とが混在します。そこで、どちらの立場の児童にとっても、楽しみながら自信や力がつくような授業を目指したいと考え、福井大学の教職大学院を志しました。勤続20年目、教員人生の折り返し地点を機に、自分の実践から省察し、一から学び直す覚悟でいます。そして、学ばせていただいたことが、子どもたちや職場にいかされることを目指し、努力したいと思えます。2年間、ご指導を宜しくお願い致します。

## ミドルリーダー養成コース1年/カリタス小学校

### 中村 恭子      なかむら きょうこ

4月より、ミドルリーダー養成コースに入りました。小さい頃からピアノを習っていたことと、大好きなアーティストの影響で、音楽の道に進むことを

選び、大学では声楽を専攻していました。ふり返ってみると、音楽を通じてかけがえのない出会いがたくさんあり、それが今の私の糧となっています。こ



れからの音楽文化を担う子どもたちと、未来の音楽の可能性を探っていきたいという想いを胸に、教員生活をスタートさせました。

現在は、神奈川県川崎市にあるカリタス小学校に勤務しています。カリタス小学校は、カナダから来たカリタス修道女会のシスターが、戦後の日本に設立したミッションスクールです。宗教の授業があり、毎日お祈りをして聖歌を歌っています。近くには多摩川が流れ、四季折々の自然に囲まれたのどかな学校です。学校では、羊や山羊を飼育しています。校庭で遊ぶ子どもたちの間を動物たちが「メェ〜」と横切っていく様子が私は好きです。同じキャンパス内には、幼稚園・中学高等学校が隣接しています。

私は音楽専科として、1年生から6年生までの音楽の授業を受け持っています。子どもたちは音楽が大好きで、音楽が聞こえると自然と体が動き、友達と一緒に跳びはねたり回ったり、すぐに盛り上がります。友達と一緒にということが、楽しい気持ちを一層盛り上げ、さらに笑顔を増やしていきます。そんな子どもたちが、主体的に音楽と関わることを目指し、日々授業に臨んでいます。取り組みも一つに「自

分たちの生活や体験を友達と歌で表現する」ことがあります。自分の想いを歌う子どもの歌声は、エネルギーに溢れ、聞いている人にも力をくれます。

音楽には、世代や地域、あらゆるものを超えてみんなで一緒に楽しむことができるという特性があります。小学校でも、音楽の時間に異学年で交流をしたり、地域の老人福祉施設へ出向いてコンサートをしたり、様々な人と音楽を通して楽しい時間を共有しています。ときには全教員が一緒になって歌ったり演奏したり、みんなで音楽を楽しんでいます。

今、学園には校種間の連携を深めていきたいという想いがあります。音楽の特性を生かし、少しでも学園の連携に力添えができればと思います。教職大学院では、校種も立場も地域も違う人たちと話をすることで、1, 2回通っただけですが、もうすでにたくさん学びがありました。自分の実践を見つめ直し、他の人の実践を聞いて自分のものとして考えていくことができます。私学にいと、どうしても狭い世界に陥りがちです。自分自身の学びを深めるばかりでなく、大学院での学びを学校に持ち帰り、還元していきたいです。



## ミドルリーダー養成コース1年/認定こども園梅園幼稚園

高木 如花 たかぎ ゆきか

はじめまして。平成29年度に教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学した高木如花と申します。現在は、福井市にある、認定こども園梅園幼稚園にて、事務長をしています。現場では、事務職と保育補助をメインに、園内整備や生きもの係もしています。

当園は、平成23年に幼稚園から、保育園部を併設した認定こども園になりました。その後、平成27年4月、子ども・子育て支援新制度が始まり、認定制度を取り入れた認定こども園梅園幼稚園となりました。認定制度では、入園を希望する際、保護者の生活状況に応じて、子ども達に1~3号の認定がつきます。新制度の大きな目的は、保護者の就労に関わらず、子ども達が養護と教育の両方をうけられること、子ども達の最善の利益を保障することとなっています。

就職した幼稚園当時は、純粋に、当園の教育活動や教育理念を選び入園を希望する保護者が大多数でした。しかし、認定こども園になり、「就労するた

めに子どもを預けなければならない」という、入園を希望する保護者の意識の変化を実感するようになりました。子育てを支援する制度という名前からも、子どもの育ちが本当に保証されている制度なのか、子ども達の立場にたった保育ができにくい環境になっているのではないかと疑問に感じることがあります。

保護者の意識の多様化と同様、子ども達を取りまく環境も大きく変化しています。AIやインターネット、スマートフォンなどが急速に普及し、利便性の向上や生活の効率化が進む時代、子ども達の学びとなる生活や遊びの場も効率化しているように感じます。しかし、子どもの成長は効率化することはできません。行きつ戻りつしながら、少しずつ大きくなっていくものではないかと考えます。これからの幼稚園現場に求められるものの考察と現在の保育を客観的に見直す機会を持つこと、そして、現場の仲間と協働して保育環境をよりよくするため、大学院では、学びを深めていきたいと思っています。さまざま

まな方との出会いを楽しみにしています。どうぞよろしくお祈りいたします。

PS 私事ではありますが、4月22日に結婚し、姓が小林となりました。大学院では、都合上、高木でお祈ります。よろしくお願いいたします。

## インターンシップ／週間カンファレンス報告

### 教師「0」年目

教職専門性開発コース3年／福井市中藤小学校 山田 芳裕

満開で咲き誇っていた足羽川の桜並木にも緑が見え始め、あっという間に四月が過ぎようとしている。暖かく過ごしやすいい日が増え、視覚的にも身体的にも、春の訪れを感じている。今年度から、小学校免許取得プログラムの履修に伴い、「院生三年目」がスタートした。これまで例を見ない、三年目。私自身、まだ見慣れない「M3」の文字……。一か月、時間を戻して話をしたい。昨年度末に同期院生が修了し、この教職大学院を羽ばたいていった。それと同時に県内外の小中高等学校に配属され、学級・教科担任と成り、教壇に立っている。誰がどう見ても正真正銘の「教師」として、現場の波に揉まれ、成長しているのであった。つい一か月程前まで他愛もない話をし、同じ時間を過ごしていた同期が、第一線で活躍しているのである。News letter No.93でも触れたが「残り後一年、更なる高みへ突き進む」という思いを持って、過ごしていく決意表明をした。しかし、あっという間に過ぎていった四月を振り返ってみると、複雑な心境になった場面があった。その場面について記述していく。

毎週木曜日に行われている週間カンファレンスが、新M2院生運営の元、4月13日にスタートした。昨年度までは私自身も運営に携わり、同期院生と意見を出し合いながら、より良い学びにしていくよう努めた。今年度は代替わりにより、運営の「主体」はM2院生となったため、我々M3院生は、一歩下がった立場でカンファレンスに参加している。午前①の「学びのふり返し」で、M2山上院生、M1松木院生、同じくM1浅島院生と同じグループになった。M1院生二人の語りの中には、素直で熱い思いがあった。「(明新小学校の学級について問われ) 小学校二年生にしては、なわとびをたくさん跳んだり、文章がしっかり書けたりで驚くことばかりです(浅島)」「(なぜ中藤小の特学を希望したのか問われ) 健常者と障がい者がお互いに理解し合える(インクルーシブ) 考え方のもと、子ども達に素地を作ってあげたくて…(松木)」など、各院生が抱えているストレート

な思いを感じることが出来た。私が二年前、初めて週間カンファレンスに参加した時と同じ、「自らが感じたことを包み隠さず語る」姿勢が二人には見られたのだ。M2の山上院生も、今年度よりファシリテーターとしての役割を担い、M1院生のお話を引き出すことが出来ていた。それだけに留まらず「自分も〇〇みたいなことあったわ〜」と、自らの経験と関連付けながらカンファレンスに参画していた。昨年一年間のインターンシップの経験を踏まえ、より具体的に実践を語る姿を見て、頼もしさと同時に心強く思えた。

そんな中、私はどうだったか。M2山上院生が中心となった話し合いの中で、私自身どのように振舞ったら良いのか分からなくなってしまった。話の軸を担うのはM2院生であり、私ではない。そのような状況だと自然に口数が減り、傾聴することが多くなっていく。「うんうん」と院生の語る言葉に頷き、その言葉の意味を自分なりに考察する…。何か物足りなさに近い感情が芽生えた。院生の話に耳を傾け、単に聴いているだけなのではないのか。M2院生の邪魔にならぬよう、あえて口出ししないようにしているのではないのか。聴いているだけではなく、もっと私自身が語る事が大切なのではないか。様々な感情が私の中を巡った。思っていることと行動に差異を感じ、気持ち悪いとまで思った。どのようにしてカンファレンスに参画することが、私にとっても他の院生にとっても良い形なのだろうか。

昨年度退任された宮下哲先生のあるお言葉をふと思い出した。「映す鏡」という言葉だ。一見すると他者の実践の中の思考・判断を、「なぜ?」と相手の行動や言葉の意味を問うた時、その場で用いる言葉や文脈は、自分自身であることに気付き、思い知る、といった意味付けがされている。カンファレンスで卓を囲む先生方や院生こそ、私の「映す鏡」なのではないか。自分自身の経験は“語る”ことだけでなく、傾聴し“相手に問いかける”ことでも意味付けることが出来るのではないのか。宮下先生のお言

葉を思い出し、私の中の複雑な感情は解消された。私自身が語り、相手に伝えるだけではない。話し聴くことにより、共に成長していけるのだと。

今年度がスタートし、お世話になっている中藤小学校の子ども達、先生方との新しい出会いがあった。この教職大学院での出会いもたくさんある。新たな

出会いは自分自身を大きく成長させてくれる。日々変化する状況の中で、私自身が最も高いパフォーマンスを発揮できる状態を探っていく。そして今年を「教師 0 年目」と定め、来年度教壇の立った時、学び続ける教師に成るための助走期間としたい。

## M3 として

### 教職専門性開発コース 3 年 / 福井市中藤小学校 長谷川 久里子

こんにちは！教職専門性開発コース M3 の長谷川久里子です。最初の小学校免許取得プログラム履修者の一人として早 3 年目を迎えています。

M3 は教職大学院では初めての学年です。そのため、先生方と相談しながら週間カンファレンスや M2 会議での役割を探しています。週間カンファレンスではファシリテーターの役割を M2 が任されています。そのため、M3 になると午前の授業では M1 同様にカンファレンスに話し手として参加しています。M2 のときはファシリテーターとして、話し合いを進めることは難しく、できればやりたくないと思っていました。しかし、M3 になりファシリテーターの役割が無くなると、なぜかファシリテートしたいという思いが出てきました。これは、現職の先生方からお聞きする、「授業ができなくなると授業がしたくなる」という気持ちと似ているように感じます。このことから、なんやかんや言いつつも、私はファシリテートすることに楽しみや面白味を感じていたのだと思います。今になってこのことに気が付き、名残惜しいですが、今年度はファシリテーターの役割は譲り、M1、M2 の後輩を支える立場として過ごしていきたいと思いません。

週間カンファレンスの午後の授業では、グループごとに大学生版 PISA 作りを今年度も行っています。この授業では M3 はグループには入らず、M2 までの 2 年間の経験を活かしアドバイザーという役割で参加しています。話し合いを見守りながら、必要などころでアドバイスをしていくという先生方がやってくださっていることに近いことをやらせていただいています。口を出し過ぎると、後輩たちの主体性が削がれてしまったり、自分たちの気づきがないままに進むことになったりします。そのため、アドバイザーはファシリテーターよりも一段と難しい役割だと感じています。見守る、アドバイスをする、この 2

つのバランスはどれくらいが良いのかを現在調整しながら毎週のカンファレンスに臨んでいます。4 月を終え、後輩たちは大体のことは私が言わなくても分かっているし、気づいていくということが分かってきました。これは学校において子供たち主体で話し合う中で子供たちが気が付いていくのを教師が待つという心情を経験しているのではないかと思います。4 月当初は言わないといけないと思っていた気持ちも、後輩たちなら気づくことができる、そう思えるようになってきました。「信頼して任せる」気持ちが M3 には必要なことだと思っています。M3 はグループに必要なに応じて、自由に入れるため後輩たちの成長を感じやすい立場にいるとも感じています。これからの成長が楽しみです。

インターンシップでは、昨年度からの持ち上がりで現在小学校 4 年生に所属しています。学部の授業履修、教員採用試験準備などで、夏までは週 1 回のインターンシップですが、限られた時間の中で子供たちにできることは何だろうかと考えながら過ごしています。昨年度までは気がかりな児童を中心に子供の見取りを行っていました。今年度は週間カンファレンスで今年度の構想を考えた際、昨年度までのことを活かし、今年度は、視野を学級全体に広げ、気がかりな児童を含めた学級経営について見ていきたいという自分の思いに気が付きました。個人が成長するには、集団の中での経験も大切であるということ を 2 年間で感じ、集団として成長する、集団の中で成長することについて見ていきたいと思いません。加えて、他学年、他学級にも行くことで、小学校全体を通して見ていきたいとも思っています。今年度の構想を考えたとき、自分自身の 2 年間での変化・成長を感じることができました。後輩たちの成長を感じていきながら、自分自身の成長についても感じていきたいと思っています。

## M3, 新拠点校へ行く

教職専門性開発コース3年／福井市明新小学校 池田 丈明

今年、遂に最終年度を迎えた。私は、2年間お世話になった附属小学校（現 義務教育学校前期課程）から異動し、新拠点校となった明新小学校でインターンを行っている。附属小学校とは距離として約600メートルしか離れていないが、全く異なる学校文化があることを肌で感じている。

私が4月からの1ヶ月で得た驚きは幾多とある。その例として、10個挙げるとする。1つ目は、子供が私服。制服がないことから、実に自由な服装をしている。子供によっては、かっこいい or かわいいキャップもしており、センスが際立つ。2つ目は、集団登校及び集団下校。子供たちは、登校は異学年で、下校は同学年である。3つ目は、子供の数。県下で1番多い児童数（約930人）を誇るため、休み時間や昼休みは子供が学校中に溢れ返っている。笑顔もまた、満ち満ちている。4つ目は、教員の数。1学年4～5組なので、担任、支援員、事務職員、管理職等、総勢約70人の先生方が在籍している。名前を覚えるのが大変である。5つ目は、登校時間。子供たちは、7時半から児童玄関に入り始め、8時前には宿題の提出と連絡帳を書き終え、8時には全員静かに読書をしている。6つ目は、チャイムの音。曲も長さも違うので、慣れるまで時間が掛かる。7つ目は、支援員の数。特に、低学年には多くの支援員が入っている。中高学年にも一定数支援員がいる。8つ目、運動場の水はけの良さ。1～2時間目に雨が降っていても、昼休みには乾いている。子供にとっては非常に嬉しい。9つ目、同学年の先生のつな

りが非常に強い。子供が多い分業務も多く、そのため学年主任の先生を中心に横の結束が強固であると感じている。そして10つ目、子供たちの学びの姿である。毎日、毎時間、毎分、子供たちは真剣に学ぶ姿を見せてくれる。彼らの成長を見守り支えることに大いなる喜びを感じている。

こうした驚きや感動、また葛藤や悩みは、明新小学校にインターンとして通うM1院生と共有している。学校内の控え室、学食、院生室、木曜カンファレンスの場などで頻りに語り合い、次への展望を開いている。他校でインターンをしている、同期・後輩院生と語り合うと、面白いほど、話す相手によって全く違う見解を示してくれる。それが自分にはない考え方や見方だったりするので、非常に勉強になる。だから、正直M3になると「まだいるの?」「もう飽きたでしょ?」と色々な先生に聞かれることが増えるものの、私はいつも決まって「それが全然飽きないんですよ。」と応える。こう素直に言えるのも、インターンを受け入れて下さっている明新小学校の校長先生、教頭先生、坪川先生、廣瀬先生を含む多くの先生方、また2年間お世話になった附属小学校の先生方、そして教職大学院の教授陣や院生たちのお陰であると強く感じている。

最後に、私事であるが、「この1年生かすも殺すも自分次第」というテーマを掲げ、公私ともに充実した1年にしようと胸に誓っている。今後とも、ご指導宜しくお願い致します。

## 「ほんもの」の学び合いを求めて

教職専門性開発コース2年／福井市中藤小学校 佐藤 琢磨

子どもと教師がともに「学び合う」とは一体どういうことなのか。そのために教師に求められることは何なのか。インターンシップの中で、木曜日に開かれるカンファレンスの中で、私は常に探究し続けている。

大学院での1年目は瞬く間に過ぎていった。右も左も分からないまま小学校へと飛び込み、6年生の子どもたちと出会った。手探りで子どもと関わり、授業実践をやらせていただいた。失敗の連続だったが、厳しくも温かく見守ってくださった現場の先生や大

学院の先生方と仲間たち、そして何より、いつも笑顔で迎え入れてくれた子どもたちに支えられ、なんとか乗り切ることができた。

子どもたちは笑顔で卒業し、中学校へと巣立っていった。インターンシップで関わった子どもたちは誰もが優しく、仲間想いで、困ったことがあるとすぐに教え合い、支え合っていた。それは、メンターの先生の「仲間づくり」によって培われた姿だった。

「私は演出家で、黒子なんです」と語っていた先生は、子ども同士の「支え合い」によって「個に応じ

た支援」を達成されていたのだ。子どもは自ら学び、支え合い、大人には見えない事実を発見する、力のある存在である、ということを実感した一年だった。

今年は高学年から低学年へ、2年生の子どもたちと共に一年を過ごすことになった。そして、私自身も大学院の2年生になった。世界はガラリと変わった。

この2週間で分かったことだが、2年生の子どもたちは果てしなくかわいい。どんなつまらない冗談でもお腹を抱えて笑ってくれる。「先生、先生！」と、お話をしにくる子もいれば、抱き着いてくる子もいる。中には私に「僕のお父さんになってください」と言う子までいる。何事にも一生懸命に取り組み、素直に表現する。

半面、失敗もする。一生懸命に背伸びをしようとするが、甘えたい自分もいる。遊びの中で意見がぶつかり、葛藤することもある。人の愛情に触れ、様々な人と関わり合い、触れ合う。その中で「お兄さん」「お姉さん」になり、力をつけていくのが2年生だ。

私もまた2年生になった。力のある楽しい後輩たちが大学院に入学してきた。大学院の木曜カンファレンスや月曜カンファレンスと一緒に話をしていると、自分にはない視点を出してきて、刺激をくれる。現職の先生方も、大学院の仲間たちも、皆学ぼうという意欲にあふれている。

私は「お兄さん」になったわけではないが、形だけは2年生になり、M2での会議を通して、木曜カンファレンスの企画を行い、院生同士のコミュニティ

を創っていく立場になった。そして、インターンシップ先でも、部会や研究会で記録や板書を任される立場を頂き、様々な形で、子どもと同じように大人同士で「学び合い」をしている。

子どもに変わることを求めるのであれば、まずは私たちが変わらなくてはならない。学習指導要領が求めるから「学び合い」をするのではない。自分たちが願う子どもの姿を語り合い、理想の授業を語り合い、問い合い、練り合う中で自分たちの実践は見えてくる。

まずは目の前の子どもと、仲間と、一生懸命に向き合いたい。そして、内へ外へと積極的に輪を広げ、大学院でのカンファレンスやインターンシップ先での研究会で、まずは様々な人の話りに耳を傾けたい。同時に、外部での研究会に参加することで、武者修行に励みたい。

「子どもも大人も、実践によってのみ変わることができる。」私が尊敬する教師の一人である、斎藤喜博の言葉だ。一年目はがむしゃらに突っ走ったが、今年は大膽にチャレンジし、「そもそも」に立ち返って冷静に省察することを大切にしたい。授業で語り、実践で語る教師を目指したいと思う。

コミュニティづくりに関わり、子どもや大人と学び合い、失敗を重ねる中で私が求める「ほんもの」の学び合いの姿は見えてくるのかもしれない。子どもの学び合いを支える大人になるための一歩を、今、ここから少しずつ始めていく。

## 悩んでいるのに、楽しい！

教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校・前期課程校

川崎 未央

福井大学教職大学院での2年目の学びがスタートした。昨年度の私の1週間は、週3回のインターンシップと木曜カンファレンス(以下、木カンと記す。)で占めていたが、今年度は、週1回のインターンシップ(2年になると、課題別実習と呼ぶ。)と木カン、残りは教員採用試験勉強の時間に当てている。

ということで、インターンシップ先の子どもたちに会ったのは現在まだたったの4日だけなのだが、悩みあり、学びありの楽しい充実した日々を過ごしている。昨年度は1年学級で学んできたのだが、私はこれまで高学年との関わりが薄く、高学年の子どもの実態や教師としての関わり方についても学びたいと思い、今年度は6年学級で学ばせてもらうことになった。お世話になる学級の子どもたちに会った初日は、1年生とは話しかけてくる内容が違ったり、私が話しかけてもうまく会話が続かなかったり、私

より背が高くてがっしりした男の子に勝手に圧倒されたりして、当たり前のことなのだが1年生とのギャップを強く感じ、これからどのようにして関わっていけばいいのだろうと少し不安になった。2日目は、その不安のせいで、積極的に私に話しかけてくる子とはコミュニケーションをとったが、話しかけづらい男の子たちとはあまり話さないまま1日を終えてしまった。自分でもびっくりなのだが、無意識のうちに避けてしまっていたのである。しかし、この学級で中心となる場面も多いこの男の子たちとの関わりなしに、この学級を見ていくのはやはり無理だと思った。そこで、3日目はその男の子たちに勇気を振り絞って何回か話しかけに行った。12歳相手に勇気を出すとは自分でも笑ってしまいそうだが、事実そういう気持ちでできるだけ多く関わるようにした。いい関わりができたとは言えないが、関わることを

無意識に避けていた 1 週間前とは明らかに関わろうとしたし、関わった。そして、3 日目はまず子どもとの 1 日のスタートを切る朝のあいさつから積極的にすることを心掛けた。すると、なんと一番関わり方に悩んでいた男の子が大きな声であいさつを返してくれた。「おはようございます。」とは言わなかったものの、1 週間ぶりに会う私に反応してくれたことが素直に嬉しかった。その日は嬉しいことがいっぱいあった。その子に話しかけていないのに私の質問に答えてくれたり、私に質問してくれたら、少しだけだが 2 人で話したりした。すると、その子がどんなことに興味があるのか、どんなことに感動するのか、どんなことが得意なのか、どんなことに困っているのかなど、もっとたくさんその子のことを知りたい、わかりたいという気持ちが湧いてきた。「関わってみな、わからん。」これは、私が勇気を振り絞って関わろうとしたあの日の放課後にメンターの近江先生がおっしゃった言葉である。その通りだと思う。子どもたちとの関わり方について悩みが綺麗さっぱりなくなったわけではない。けれども、関わり方に悩みながらも関わってみようとしたことで、その子との関わり方が変わったし、また新たな自分の課題も見えてきた。悩んでいるのに、闇の中で手探りしているのに、それが楽しい。もやもや・つかかりが私の考えるきっかけとなって、その先のものをもたらし、このサイクルがずっと続いていくのが楽しいのである。つらいのだけれど。

同じようなことを思う場面が、ほかにもある。木カン後の M2 会議である。M2 になると、院生の学びの場である木カンの運営をしていくことになっている。その前に、木カンの 1 日の概要についてだが、この日は 9 時から 17 時まで全院生が集い、すべての時間において小グループで語り合いながら自分の実践を捉え直したり考え合ったりする。午前 1 はインターン先での 1 週間の悩みや振り返り、午前 2 はそのとき院生に必要なことについて院生が企画し、1 ヶ月かけて考え学び合う時間、午後 1 は複雑な社会問題をテーマに大学生版 PISA の資料収集・作成・解答・評価までを行う中で、正解が 1 つでないものについて解答者が悩み多面的に考えられるようにする

にはどうしたらよいかを考える時間、午後 2 は 1 ヶ月交代で 1 院生の授業についてグループ全員で系統性や教科横断も視野に入れながら授業づくりをする時間となっている。M2 会議に話を戻す。第 1 回 M2 会議は木カン後の 17 時から始まったのだが、なんと終わったのは 21 時であった。それも、もうみんな疲れ切っているから別日にしようという終わり方であった。昨年度の M2 は 8 人だったが、今年度はなんと 12 人と多め。したがって、今年はず 3 グループに分かれて話したあと全体で話し合っているのだが、次から次へと課題や提案が浮かんで来て、どれも一長一短でなかなか話がまとまらないのである。これは、協働のよさであり、難しさでもある。M2 会議は授業中の子どもたちの姿とも似ているし、授業づくりとも似ている。前者は、話し合いながら協働しているときに感じる。なかなかまとまらずつらいのだが、みんなで一つのことを考え合っているのが楽しい。新たな考えが自分の中に舞い込んで来て自分の考えの幅が広がるし、自分一人では考えきれないものがみんなで考えることでよりよいものへと近づいていくから。子どもたちにもこんなふうに協働のよさを感じてほしいと思う。後者は、協働の難しさに直面したときに、子どもたちに協働させるときの教師の課題として感じる。また、木カンの運営において院生がそれをするそもそもの目的や意義について吟味し、共有することは、授業において子どもがそれを学ぶ目的や意義(ねらい)を考えることと同様大切なことであるとも思う。会議の運営の仕方についてはこれから考えながら進めていく必要がある。何が正しいのかなどわからないし、疲れるし、悩みは尽きないけれど、M2 一人一人が考えていることを思う存分聞けるこの場が素直に嬉しくて楽しい。

去年 1 年間を過ごし、「悩み」があるっていいなと思うようになった。去年の今頃は、「こんなちっぽけなことどうでもいいか。」と自分の悩みや違和感をどこか軽く捉えていたように思う。しかし、今は違う。悩みや違和感、もやもや、つかかりが私に思考を促してくれている。自分の素直な感覚を大事にしながら学び続けていきたい。

## 月間カンファレンス報告

4月15日（土）・16日（日）の2日間（B日程は4月22・23日）、今年度最初の合同カンファレンスが開催されました。最初は緊張した面持ちがあちこちに見られていましたが、次第にどのグループにも笑顔があふれ、語りに熱を帯びていっている様子が感じられました。

### 新たな始まり

教職専門性開発コース2年／福井市中藤小学校 北本 瑞穂

4月に入り、土曜と日曜に合同カンファレンスが行われた。合同カンファレンスで毎回顔を合せていた先生方は卒業され、寂しい思いであるが、新しく出会う先生方と話すのはとても新鮮だった。一日目は、グループでお互いに自己紹介をした。偶然なのかは分からないが、中学校の先生・小学校の先生を目指す自分・幼稚園の先生のアドバイスを先生と幼稚園、小学校、中学校という異校種が集まったグループになった。幼稚園の先生の話聞く機会が減多にないので、興味を持って話しを聞くことができた。幼稚園の先生は、小学校での縦の繋がりを大切にしていきたい、また、小学校の先生にも幼稚園での取り組みを理解してほしいと話していた。幼稚園での取り組みを小学校の先生が理解をしていくことで、子どもたちにとって、よりよい学びになっていくと考える。実際には、子どもができることを先生が指示をしていることが多いという話もあり、小学校の先生も幼稚園での取り組みを知り、子どもが

どこまでできるのかを見取することも大切になることを学んだ。子どもを見取ることや幼稚園での取り組みを知り、よりよい学び場を作っていきたい。

また、卒業した先輩の長期実践を読んだ。クラスの一員（先生）だということを忘れずに二年間取り組んでいたことが伝わってきた。クラスのために、何ができるのかを考えることによって、子どもたちが成長していくと感じた。子どもが、成長することが自分の中での報酬に繋がっていく。子どもたちにどう成長してほしいのかを考えて、個を見ながら全体を見ることによって全体の成長や個の成長が見えてくるのではないかと考える。自分がこのクラスの一員だということを忘れずに、個を見ながら全体の成長を見ていきたい。メンター（担任の先生）と話すことも大切にし、自分がどう行動すべきなのかを考えていき充実した1年間にしていきたいと考えている。

### 平成29年度4月月間合同カンファレンスに参加して

学校改革マネジメントコース2年／高浜町立高浜中学校 一瀬 泰史

4月15・16日に今年度初の合同カンファレンスに参加した。どの学校もとても忙しい年度初めである。この忙しい時期に、一泊二日での大学でカンファレンスとなった。前日の金曜日は職場の歓迎会で、眠い目をこすりながらの二年目のスタート。さらにこんな時期に、高浜中学校ではインフルエンザB型が猛威を振るっており、春季中体連大会一週間前にも関わらず、金土日の部活動を全面活動停止にしていた。大学院がなかったら、ずっと学校で仕事をしていられたのという残念な？思いを引きずりながらの参加でもあった。

高浜中学校は、今年度2学級減となり、教員は3

名減となった。初任者も例年のように赴任した。職員構成としては、教職経験5年未満の教員が一番多く、次いで経験20年以上、そしてその間が極端に少ない“中抜け”の構成が更に進み、ミドルアップダウンによるマネジメントが難しい状況である。若手を戦力として育てることは喫緊の課題とも言える。このようなことから、今年度の自分自身の興味関心は、若手育成に向かっている。昨年度取り組んできた同僚性向上・多忙感軽減の取り組みと関連させて取り組んでいきたい。

最初のオリエンテーションでは、小杉先生から資料を読み取ることの大切さ、教育改革に主体的に関

わっていこうとする意欲の大切さをお聞きした。日々忙しくしていると、このような教育改革関連文書を読む機会が無いというか、正直読む気が起きないものであり、時間が与えられるということのありがたみを感じながらじっくり読み進めることができた。その中で、特にミドルリーダーの育成研修が興味深かった。今年度から県の研修体系が大きく変わっている。このような答申等を受けて、目の前の現実が変わってきていることを実感として感じ取れた。

また、先輩方の長期実践報告を読む機会も得られた。私は、若手教員育成に取り組んでおられる気比中学校の浜上先生の報告書を迷わず読み進めた。敦賀市教委の指導主事として取り組まれた研修の改革や、学校現場に異動されてからの若手育成の取り組み、そしてその裏にある思いがしっかりと伝わって

きた。また、研修対象である若手教員それぞれの感想や思いがよくわかり、高浜中学校での若手育成の参考としたいと感じた。

2日目の最後は、マネジメントコースのメンバー4名でのセッションであった。敦賀市・小浜市・高浜町の現在の状況を紹介し合い、改めて中学校の状況の大変さを感じた。特に生徒減による影響はその学校のみならず、地域に及ぼす影響が大きいことを感じた。高浜町では現在、児童生徒が将来にわたって高浜町に住みたいと考える率を高めるため、様々な分野で取り組みを進めている。地域とのつながりという視点からマネジメントコースでの学びがそれぞれの地域にプラスに作用するよう、今年度の研究を進めていきたい。

## 4月合同カンファレンスを終えて

学校改革マネジメントコース2年/福井市明新小学校 坪川 修一郎

1年前には「教職大学院ではどのような学びがあるのだろうか？」とうきうきした気持ちで4月のカンファレンスを迎えていた記憶がある。それから1年・・・今年のカンファレンスを迎えるにあたり、なぜか昨年のようなうきうき感を感じなかった。はたして、このような気持ちで今年のスタートを切って大丈夫だろうか？と不安な気持ちで会場にいた。しかし、そのような不安は杞憂に終わった。2日間を終えた時には、不安に思っていた気持ちは何だったのだろうかというぐらい充実感に満ちた気持ちになっていた。

2日間で何度かグループを変わり、自己紹介で自分のことを語ることになった。事前に用意したメモには、「学校改革」「マネジメント」ということを意識して、それにかかわる取組をピックアップしてまとめてあった。しかし、他の院生の方の話を聴いていくうちに、メモにまとめたことを意識せずに自分が昨年1年の実践や大学院での学びで実感として今、感じていることを素直に語ろうという気持ちになった。

繰り返し昨年の自分のことを語っていくうちに、自然と1年間の実践のキーワードが浮かび上がってきた。そのキーワードが「子どもの姿からはじまる」「同僚性の大切さ」である。1年前に現任校に赴任したが、スタートした時には、授業・学級づくりとも非常に厳しい状況であった。それが、徐々に良い方向に変化していった。その要因は何だったのだろうか？というようなことを考えながら、自己紹介で何度も語っていくうちに先に述べたキーワードが浮かび上がってきたのである。繰り返し語っていく中

で自然と浮かび上がっていく感覚は不思議なものであった。柳澤先生から「変わっていった要因はいろいろあって複雑なものだ。それをさぐっていくことも大事である」という言葉をいただいた。「学級担任である自分に学校組織のマネジメントなんて・・・」と言い訳ばかりして、学級担任としての実践と組織マネジメントを別物として考えてやっていたとしてきていたが、その2つを切り離して考えなくてもよいのではないかと思うようになった。「子どもの姿からはじまる」「同僚性の大切さ」というキーワードは学級・授業づくりだけでなく学校という組織を動かしていく上でも大切なことであることを再認識した。

2日目の長期実践報告を読む機会には、昨年カンファレンスでも何度かお話を聴かせていただいた口名田小の正木先生の実践を読むことにした。昨年とはとりあえず「チーム力」「マネジメント」など自分の所属しているコースに関係のありそうな部分をピックアップして読んだ。今回は、とにかくじっくり読むということに徹してみた。(そのためメモをまとめる時間がなくなってしまったが。)正木先生の実践報告には、特別支援学級の交流学級担任になり、全ての子どもの学びを保障する「子ども中心の授業」の様子や、研究主任として「ビジョンを共有していく」ことの難しさ、苦悩が詳細に記されていた。教職員一人一人が組織のビジョンを共有していくこと、そして「当事者意識」をもって取り組んでいくことは、当たり前のことのようであるが簡単なことではないと思っている。そのような視点から正木先生が試行錯誤しながらすすめた実践にふれることができ



たことは非常に有意義であった。

聴く、語る、読むということに取り組みながら、何となく悶々としていた自分の思いが少しずつ晴れていき整理されていく2日間であった。そして今、1年目に感じていたうきうき感とは違う思いを感じ

ている。それは、昨年度の学びを深め、具体的にすすめていくにあたって、どのような変化が起こっていくだろうかというワクワク感（期待感）のようなものである。このワクワク感を大切にがんばっていききたい。

## 平成29年度 教員免許状更新講習について—県と大学との協働—

### 福井大学教職大学院 准教授 小杉 真一郎

教員免許更新制は平成21年4月に始まりましたが、教育職員免許法第9条の3に基づき、全国の大学等で開設された教員免許状更新講習は、今年度で9年目を迎えることとなります。

本学におきましても、受講者の先生方に満足いただけるよう、毎年度いずれの分野・領域でも、創意工夫に富んだ講座を積極的に開設してきております。特に、これまで必修領域（教育実践と教育改革Ⅰ）を担当する本教職大学院では、開設当初から「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ—実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る—」をキーコンセプトに、専門職として探究し合う新しい方法を採用した講習を実施してまいりました。

今年度からは、Newsletter No.96でもお知らせしましたとおり、福井県教育委員会との共催となり、福井県教育総合研究所が行う中堅教諭等資質向上研修と兼ね、世代ごとのテーマも設定することになりました。県教委との共催ということで、誠に残念ですが、これまで強いモチベーションをもって受講いただいていた保育士の方、私立や県外の教員の方には受講いただけない状況になりました。一方で、これまで一部の方しか受講していただけなかった本教職大学院の講習内容を県内の国公立の学校幼稚園の教員全員に受けていただくことができるようになったことは誠に喜ばしいことと感じております。

プログラムの特色としては、これまでの本学教職大学院のスタイルを引き継ぎ、次のようになっております。

**教職大学院の教師教育のノウハウを生かして、「実践・省察」を視した講習にしていること**

**少人数による話し合いを基本とし、そのグループ構成は講習、年齢、地域、教科等の枠組みを解いたものにしていること**

**必修領域6時間に、選択必修領域である「教育実践と教育改革Ⅱ」の6時間、選択領域である「教育実践と教育改革Ⅲ」6時間を加えて、連続3日間の計18時間で一括りとする講習を提供していること**

1日目は、受講者が自らの教育実践をまとめたレポートの報告から始まります。実践の経験を交流し課題意識を共有するため、グループのメンバーで語り合い・聴き合いを行います。その後、国の施策や世界の動向、子どもの発達についての最新知見を学び、午後からはグループ内で、今後の実践に向けての展望を考えながら、優れた実践事例資料を読み深めていきます。2日目は、年代別に3コース（「授業づくり」「子どもの発達支援」「組織的な学校づくり」）に分かれ、国の動向や学校を巡る近年の変化や気がかりな子どもへの対応を学びつつ、テーマと関連する優れた実践事例を1つ取り上げて考察し各自レポートにまとめます。その後、コース・年代・校種を交えた新たなメンバーで構成されるクロセッション（報告会）を行います。3日目は、教師としての自分の歩みを振り返り今後の展望を拓く目的で、2日目のレポートに自身の教育実践を加筆したものを完成させ、クロスセッションで報告しながら省察を深めるという流れになっています。

今年度は、福井県教育委員会との共催となったこともあり、レポート作成や報告に必要な時間の確保、優れた最新の実践事例資料の収集、ファシリテーションのスキル向上等、これまで課題だった点を若干改善いたしました。

今後も、事後評価アンケート等から受講者のニーズや要望をしっかりと受け止めながら、実際の教育現場で大いに活かせるような一層充実した講習にするため、さらに適切な内容吟味、丁寧な運営を心がけていきたいと考えております。

講習の詳細については、以下のとおりです。

**対象の職種** 福井県採用の教員で、現在国公立の学校に勤務する者

(教諭、実習助手、寄宿舎塩津院、栄養教諭、学校栄養職員、養護教諭)

**講習名** 教育実践と教育改革Ⅰ(教育の最新事情①)・・・必修講習部分(1日間)

教育実践と教育改革Ⅱ(教育の最新事情②)・・・選択必修講習部分(1日間)

教育実践と教育改革Ⅲ(教育の最新事情③)・・・選択講習部分(1日間)

**日程・会場** ①平成29年 7月24日(月) 7月25日(火) 7月26日(水) 3日間とも福井県教育総合研究所

②平成29年 8月 8日(火) 8月 9日(水) 8月 9日(木) 3日間とも福井県教育総合研究所

③平成29年 8月16日(水) 8月17日(木) 8月18日(金) 3日間とも嶺南教育事務所

④平成29年 8月23日(水) 8月24日(木) 8月25日(金) 3日間ともサンドーム福井

⑤平成29年12月25日(月) 12月26日(火) 12月27日(水) 3日間とも福井県教育総合研究所

※受講エントリーは5月31日までに県教育総合研究所ホームページからお願いします。

## 研究紹介

### 今、なぜカリキュラム・マネジメントなのか

福井大学教職大学院 教授 倉見 昇一

次期学習指導要領についての中教審答申<sup>1)</sup>では、学習指導要領等の改善の方向性の一つとして、“カリキュラム・マネジメントの実現”が挙げられている。ここでは、カリキュラム・マネジメントが求められている理由や背景について少しだけ整理したい。

#### 1. 資質・能力の育成と教科等横断的な視点

一つに、今回の学習指導要領の改訂が、これまで以上に、「資質・能力の育成」に着目して検討されたことと関係がある。

答申においては、子供たちの現状や課題に的確に対応していくためには、「生きる力」をより具体化し、それがどのような資質・能力を育むことを目指しているのかを明確にしていくこと、それらの資質・能力と各学校の教育課程や、各教科等の授業等とのつながりが分かりやすくなるよう、学習指導要領等の示し方を工夫することが求められると提言している。そして、新しい学習指導要領等に向けての改善事項として、①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)、②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間につながりを踏まえた教育課程の編成)、③「どのように学ぶ

か」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)などをはじめとする6点を挙げ、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、子どもたちに求められる資質・能力を育てていくためには、この6点に関わる事項を各学校が組み立て実施し、不断の見直しを図ることが求められるとしている。そして、こうした「カリキュラム・マネジメント」を以下の三つの側面で捉えている。

- ①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

文部科学省初等中等教育局教育課程課長の合田哲雄氏は、このうち①の教科横断の視点が重視されて

おり、これは、今回の改訂については、子どもたちに育成すべき「資質・能力」の観点から検討を行ったことと深く関わっていると述べている<sup>2)</sup>。

もとより「生きる力」は全人的な力であるから、それを育むためには、横断的・総合的な指導を講じる必要があるが、新しい学習指導要領が、これまで以上に「資質・能力の育成」に着目して検討されたことにより、これからの時代に求められる資質・能力を育成するためには、教科等を横断した(越えた)視点に立った学習が重要であり、教科等間のつながりを捉えた学習を進める必要があることから、この「カリキュラム・マネジメント」の重要性が謳われたと言える。

## 2. 学校裁量の拡大

カリキュラム・マネジメントの背景として、学校裁量の拡大の視点が挙げられる。中留は、カリキュラム・マネジメントが「1998年以降の新たな経営環境の変化を受けていること、具体的にそれは学校の自主性・自律性としての「教育課程行政の裁量拡大」にあること<sup>3)</sup>」とし、吉富は、「カリキュラムマネジメントの推進が求められる背景として、近年、学校の自主性・自律性を高め、地域に開かれ創意工夫を生かした特色ある教育活動が展開されるよう、学校の裁量の拡大が図られてきていること<sup>4)</sup>」としている。

学習指導要領においては、平成10年(1998年)の改訂で、「各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること」が基本方針の一つとして掲げられ、総合的な学習の時間の創設、授業の1単位時間や授業時数の運用の弾力化、教科によって目標や内容を2学年まとめて示すなどの大綱化が図られた。平成15年の一部改正では、学習指導要領の「基準性」を踏まえ、学習指導要領に示していない内容を加えて指導することを明確化し、平成20年の改訂では、長期休業日を含め各教科等の授業を特定の期間に行うことができることをより明確に示したり、10分間程度の短い時間を単位として行った指導も一定の要件のもと年間授業時数に含めることができるようにした。このように学習指導要領の大綱化・弾力化の推進によって、各学校では、かなりの程度、創意工夫を発揮して教育課程の編成・実施ができるようになった。平成20年の中教審答申<sup>5)</sup>では、「各学校は、大綱的な基準であるこの学習指導要領に従い、地域や学校の実態、子どもたちの心身の発達の段階や特性を十分考慮して適切な教育課程を編成し、創意工夫を生かした特色ある教育活動が展開可能な裁量と責任を有している」と明言している。

吉富は、「教育課程の基準である学習指導要領に

おいてその改訂ごとに学校の裁量が拡大しているということは、各学校が自らの責任でより適切な教育課程の編成・実施を追究することが強く求められるようになっていくということであり、「各学校が自主性・自律性を発揮して適切な教育課程の編成・実施を追究し、信頼される学校づくりを進める観点からも、カリキュラムマネジメントを進めることが不可欠である」としている<sup>6)</sup>。

今回の中教審答申では、「何を知っているか」とどまらず「何ができるようになるか」という観点から、育成を目指す資質・能力を三つの柱として整理している<sup>7)</sup>。各学校においては、この資質・能力の三つの柱に基づき再整理された学習指導要領等を手掛かりに、「カリキュラム・マネジメント」の中で、学校教育目標や学校として育成を目指す資質・能力を明確にし、教育課程を編成していくことが求められる。

### 【注】

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」平成28年12月21日
- 2) 『総合教育技術 2016年1月号』小学館、文部科学省初等中等教育局教育課程課長 合田哲雄氏へのインタビュー p.11
- 3) 田中統治 編集『確かな学力を育てるカリキュラム・マネジメント』教育開発研究所、2005年、中留武昭「カリキュラム・マネジメントによる学校経営」p.53
- 4) 田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵 編著『カリキュラムマネジメント ハンドブック』ぎょうせい、2016年、p.10
- 5) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」平成20年1月17日
- 6) 田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵 編著『カリキュラムマネジメント ハンドブック』ぎょうせい、2016年、p.11
- 7) ①「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」、②「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」、③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」

# 実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions

福井大学総合研究棟 V (教育系 1 号館) (予定)

6/23 Fri. 17:30-18:40 プレセッション @コラボレーションホール

6/24 Sat. 13:00-17:40

13:00-13:10 オリエンテーション

13:10-14:10 ナレッジ・フェア (ポスターセッション) @ 1・2階ロビー

14:20-15:50 シンポジウム

16:00-17:40 フォーラム

Zone A 学校 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ：新しい世代を支える

Zone B 教師教育

B1 教員研修体系の新たな構築と今後の展望「変わる教員研修」

: 教職大学院と教員研修センターの有機的連携

B2(a) これからの学部段階の教員養成を考える：実践を聴き、夢を語る

B2(b) 学部学生のクロス・セッション 授業/活動：語ろう・聴こう・出会い直そう

Zone C コミュニティ 持続可能なコミュニティを培う

Zone D 授業研究 子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

6/25 Sun. 8:20-14:00 ラウンドテーブル・クロスセッション

申し込みは、福井大学教職大学院ホームページにある参加申込書 (Excel ファイル) に必要事項をご記入いただき、福井大学教職大学院代表メールアドレス (dpdtfukui@yahoo.co.jp) まで添付ファイルにて送付ください。

## Schedule

6/3 Sat 13:00-15:00 コラボレーションホール 教職大学院 カリキュラム説明会

6/23 Fri -6/25 Sun 実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions

7/8 Sat 合同カンファレンス (A 日程)

7/15 Sat 合同カンファレンス (B 日程)

【編集後記】新緑が眩しい季節を迎えました。今年度最初の合同カンファレンスも無事終了し、新たな一歩を踏み出した院生やスタッフの声が多数寄せられた、彩り豊かなニュースレターとなりました。それぞれの報告から、春の息吹を感じていただけることと思います。(笹原)

教職大学院 Newsletter **No.98**

2017.5.13 内報版発行

2017.5.20 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp